

2 石槨・石棺と出土状況の復元

中村 弘

はじめに

雲部車塚古墳の埋葬施設と副葬品の一部は、1896（明治29）年5月19日におこなわれた地元雲部村村長木戸勇助氏を中心とする地元住民の発掘により明らかとなった。幸いにも当時の様子が記録され、かつ、それが現在まで長く保管されてきたために、完全ではないにしてもある程度の復元・検討が可能となっている。とくに、木戸氏が綴った『車塚一蒔』^{註1}には発掘の経緯や関係する公的な書類の写しとその添付図が綴じられているし、ほかの絵図の中には美しく彩色され、絵としての完成度が高いものも含まれている（図版2・3）。これらの記録類については、池田正男氏の論考に詳しい〔池田2002〕。

さて、兵庫県立考古博物館を建設するにあたり、雲部車塚古墳の埋葬施設および副葬品の配列状況を実物大で復元することになったが（第1章第2節）、復元のために与えられている資料は、1896年の発掘に関するものとして、①取り上げられた一部の出土品（現・京都大学総合博物館保管）〔京都大学総合博物館1997〕、②発掘時やその直後に描かれた絵図、またはそれを写した絵図、③新聞記事などの同時代資料、の3点がある。とはいえ、絵図はその性格上精密なものではないし、記録についても発掘直後のものから数年の期間が空いたものまであり、互いに矛盾を含むなどあいまいな部分も多い。しかし、当館のコンセプト〔兵庫県教育委員会2004〕に沿うために、上記の条件のもとという制約はあるが、類例などを参考としつつ、できる限り本来の様子に近づけるよう大胆に復元した。絵図などでは表現されていないような竪穴式石槨と長持形石棺の詳細な構造については、大阪府津堂城山古墳〔藤井1982〕、奈良県室宮山古墳〔秋山・網干1959〕が基本となっている。

以下、本稿では与えられた資料をもとに検討し、展示・復元の際におこなった検討を提示するが、基本的には発掘当時の絵図^{註2}と、できるだけ古い明治期の記録^{註3}を復元の根拠としている。なお、絵図や記録にもとづく基礎的な資料の評価については、池田正男氏の論考に拠っている〔池田2002〕。

（1）竪穴式石槨の復元

墳丘での位置 栗林貞清氏による記録〔栗林1897〕および『三丹新聞』によると、石槨は墳丘主軸と並行し、主軸から南へずれたところに構築されていた。その後、1926（大正15）年頃に雲部車塚古墳を訪れた末永雅雄氏も「…後円部のやや南偏りにあり、いまもその上に榊を植えてある。この個所を後円部の平面に対照すると北にもう一つの棺槨施設があると思われる…」〔末永1961 pp.32-33〕としており、もう一つの埋葬施設の存在を示唆している。なお、『御治定御願』付図には、この石槨を方形に囲む埴輪列が描かれている。

石槨を復元した展示では、墳丘における石槨の位置を表すことができないため、ハンズオン展示資料の一つとして透明の墳丘立体模型を製作し、その中に発掘された石槨の位置を赤色で示すことで、さらにもう一つの埋葬施設の存在を想像できるようにしている。

天井石 墳頂部から深さ「三尺」（約0.9m）のところで検出された^{註4}。5石^{註5}の「切石」からなり、大きさは縦「八尺」（約2.4m）、横「四尺」（約1.2m）、厚さ「一尺程」（約0.3m）^{註6}であった。長持形石棺が使用された石槨天井石の類例をみると、津堂城山古墳や室宮山古墳、奈良県屋敷山古墳〔菅谷ほか1975〕では、天井石どうしが接する側面は直線的に、石槨の内面側は平滑になるように加工がなされているの

で、「切石」と表現されたのはこのような加工のある蓋石であったのであろう。とくに、長持形石棺の形態が竜山石製の典型的なものであれば、石槨天井石にも竜山石製が使われている例がある^{註7}ので、復元にあたってはこれらの天井石を参考としている。ただし、天井石の記録の中に縄掛突起が存在したような絵図や記述がないので、屋敷山古墳や奈良県佐紀陵山古墳〔石田1967〕などのような突起はなく、津堂城山古墳や室宮山古墳のような突起のない形状であったと考え、復元している。

規 模 『車塚一蒔』付図、『顛末記』によると、長さ「凡一丈七尺三寸許」(約5.2m)、幅「凡五尺一寸許」(約1.5m)、高さ「凡四尺九寸許」(約1.5m)であったと記されている。この数値は資料によって若干の違いがあり、『神戸又新日報』、『東京朝日新聞』には長さ約「四間」(約7.3m)、幅約「六尺」(約1.8m)、高さ約「五尺」(約1.5m)であったとしている。復元にあたっては、もっとも資料的価値が高く、図にも示されている『車塚一蒔』の数値を根拠とした。

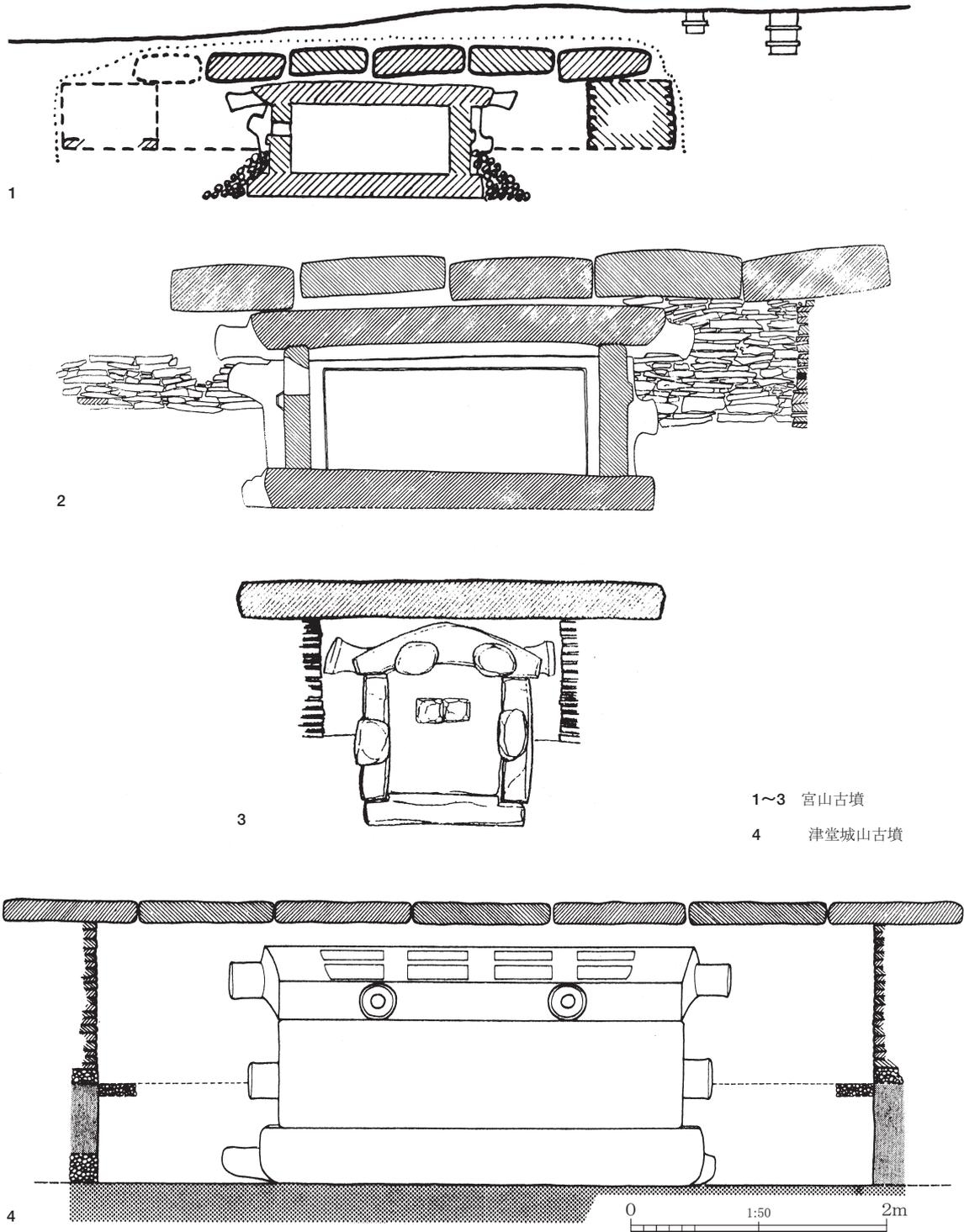
側 壁 側壁には「焼瓦の如き大小不同の石」^{註8}が使われていたとある。『御治定御願』付図にも焼瓦を積んだような石槨壁面が描かれているので、石槨は板石を積み上げたものであったのであろう。

石材について末永雅雄氏は、「和泉砂岩の破片が封土上に多数散乱」しており、「本古墳の石室が和泉砂岩を以て積成されてあつたと云ふから、石室積成の際の破片、若しくは残余を、葺石同様の目的を以て封土上に散布したのかも知れない」と記している〔末永1934 pp.284-285〕。石材の類例をみると、室宮山古墳の石槨壁面石材が紀ノ川流域の結晶片岩、津堂城山古墳は壁面石材と思われる石が柏原市亀の瀬産出の輝石安山岩であり〔奥田2002〕、一定ではない。また、兵庫県下では長持形石棺と竪穴式石槨をあわせもつ大型古墳の例が明らかではなく、石材については不明といわざるを得ない状況である。今回の復元に際しては、地元の丹波地方で産出される「丹波鉄平石」という板状節理が発達した溶結凝灰岩をモデルとした。

壁面は赤く塗られていたようで、『御治定御願』付図に赤く塗られているとともに、記録の中にも「朱を以て塗抹」^{註9}、「塗るに丹朱の如き赤色のものを以てし」^{註10}などと記されている。石槨内に赤色顔料が塗布されるのは津堂城山古墳・室宮山古墳においても確認されていることであるので、雲部車塚古墳においても同様であったのであろう。ただし、雲部車塚古墳の赤色顔料は分析されておらず、何に由来するのかは不明である。復元に際してはベンガラの色調に合わせるようにしている。

構 造 発掘調査がおこなわれた室宮山古墳を参考とした(第56図1~3)。盗掘はされていたものの、おおよその構造と築造過程が明らかとなっている。それによると、①固い地盤の上に石棺底石を置く、②その上に側石を立て、蓋石をのせる、③石棺の四方側石の周囲一帯は、その高さの中ほどまで拳大の花崗岩の割石によって約45度の傾斜をもつように強固に根固めし、側石が外側に倒れることを防ぐ、④石棺を根固めした高さまで砂質壤土で覆い、その上に石槨の側壁を積み上げる(結果として、石棺のほぼ中央の高さから上に石槨の側壁が積み上げられることとなる)、⑤側壁と石棺との空間全面に朱彩した白礫を散布する、⑥白礫層の上に副葬品を置く、⑦石槨の天井石をのせる、という順で築造されている。また、石槨の構造について、「石室側壁下端よりほぼ水平に厚さ3厘の固い層」があり、「石室側壁外側は垂直に積まれ」、先の「固い層まで石室全体にわたり厚い粘土によって覆われている」とある〔秋山・網干1959, 末永1961〕。

津堂城山古墳については藤井利章氏によって復元がおこなわれている(第56図4)〔藤井1982〕が、その際に室宮山古墳例が参考となっているように、両者間に大きな矛盾はない。すなわち、「①石棺底石設置面の造営、②石棺底石の設置、③石室下半の粘土基礎の造営、④石棺側石の設置、⑤側石が崩れない



1~3 宮山古墳
4 津堂城山古墳

第56図 竪穴式石槨の構造

様石室内下半に埋土、⑥雲母片岩による小口積み竪穴式石室の構築と同時に石室内に白礫を敷く、⑦被葬者と副葬品を納入、⑧石棺蓋をかける、⑨石室・石棺全面に朱を塗布して天井石を渡す、⑩天井石内面にも朱を塗布して最後の天井石を渡す、⑪最後に雨水等の流入等をさけるため、粘土等で石棺（筆者註：室か？）全面を覆う」としている。このうち室宮山古墳との相違は石槨の基礎となる部分の構造で、室宮山古墳の場合、石棺側石の固定作業（「根固め」+「砂質壤土」）が終了した後、その上に石槨側壁を構築しているのに対し、津堂城山古墳の場合は、石槨部分の基礎と石棺側石の固定が異なる作業と理解さ

れている点である。しかし、両墳とも石棺の下半を土中に埋め込むようにして固定し、その後に石棺上半を覆うように石槨側壁が構築されている点は共通している。

このような竪穴式石槨と長持形石棺との関係に留意しつつ雲部車塚古墳の絵図をみると、石棺は中央付近の高さまで埋められており、底石はみえない。そして、石槨と石棺の隙間には白の玉石が敷き詰められている状況が看取される。この状況は先の室宮山古墳と津堂城山古墳においても認められるものであり、雲部車塚古墳の石槨についても基本的な構造、すなわち石棺下半部を固定したのち、上半部を囲むように石槨石材を構築するという構造は同様であったと推定される。

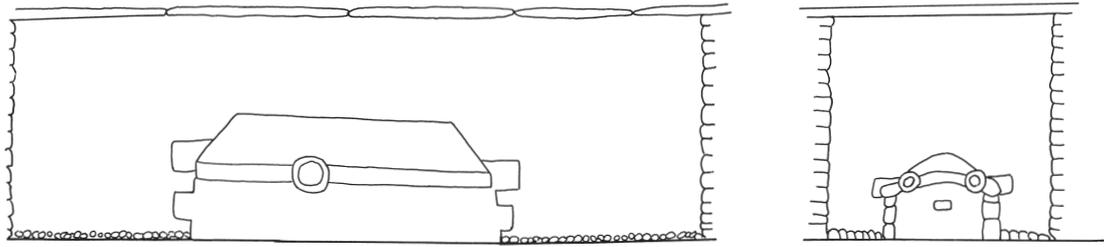
床 面 「透明なる海石」(『東京朝日新聞』)、「白色の海石」(『三丹新聞』)、「玉子の如き丸い海石」[高家 1908]、「白の玉石」(『御治定御願』付図)などと表現された石が敷き詰められ、石棺の下半部が隠れている。白い玉石が使用された古墳については西口陽一氏と宇垣匡雅氏がまとめており[西口 1987, 宇垣 1987]、産出地として西口氏は兵庫県淡路島の吹上浜、宇垣氏は石英片岩円礫として紀伊あるいは阿波を推定している。このような白い玉石は畿内の前期から中期の大型古墳で確認されており、長持形石棺や、それとの関連性が高いと考えられている石棺とともに使用されている例も多い。そのうち雲部車塚古墳と同様に石槨と石棺の間に敷かれた例として、津堂城山古墳・室宮山古墳がある。雲部車塚古墳の白色の玉石がこれらと同一の石材であったかどうかは確認できていないが、中期の大型墳に認められる埋葬施設構築法の一要素が雲部車塚古墳にも存在するとして位置づけることができよう。今回の復元にあたっては、西口氏の指摘にそって淡路島吹上浜でみられる白色円礫を見本にしている。

白色円礫層の厚みについては、雲部車塚古墳では明らかではなく、津堂城山古墳が「数寸」[坪井 1912]とあるので、それに合わせ10 cm程度に復元している。

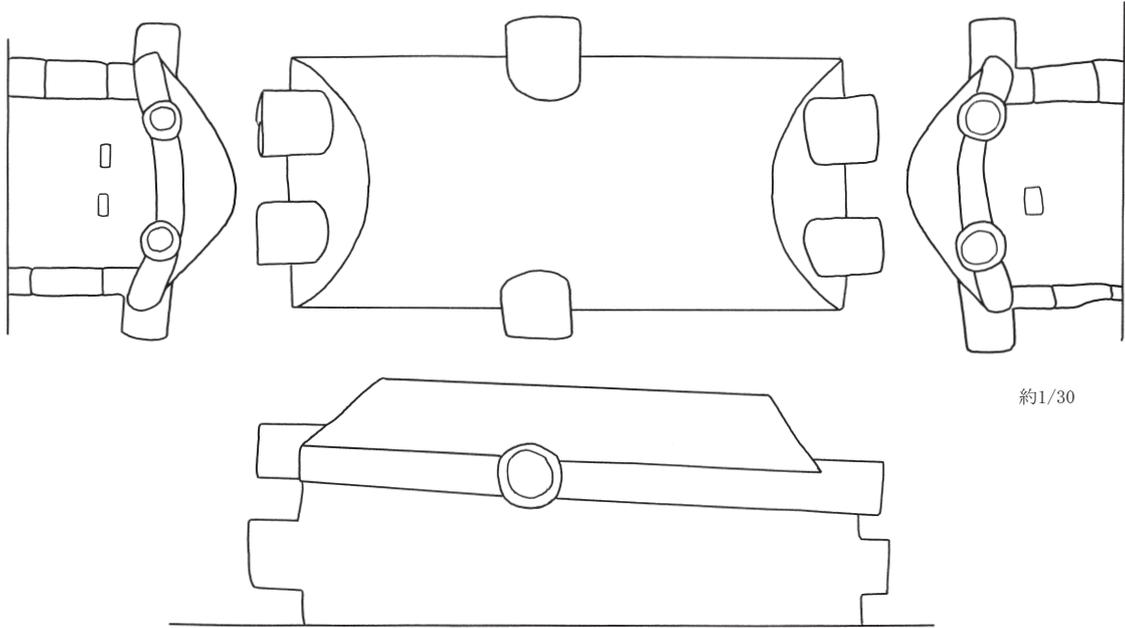
(2) 石棺の復元

『車塚一蒔』(第57図)や『御治定御願』(図版2)の付図に描かれた石棺には以下の特徴がある。①蓋石の縄掛突起数は、長辺に各1個、短辺に各2個の計6個で、長辺側の突起は片側(短側石の方形突起2個側)に寄っている、②縄掛突起の断面形は、蓋石にあるものが円形で、長側石にあるものが長方形である、③蓋石は高さがあり、屋根状を呈する、④蓋石の外面は無文である、⑤蓋石短辺側は傾斜する、⑥短側石には方形突起が西側(後円部側)に2個、東側に1個ある、⑦短側石の上面は弧を描く、などである。復元はこうした絵図に描かれた特徴に留意しているが、法量については計測部位、すなわち縄掛突起を含む数値であるかどうかの問題がある。数値が縄掛突起を含んでいるとした場合、高さ、長さの比率が『車塚一蒔』に描かれた図のようにならないため、数値は縄掛突起を含まないものであると判断した。その結果、法量は縄掛突起を含まず、身と蓋と組み合わせた状態で、長さ「七尺二寸許」(約2.1 m)、幅「三尺四寸許」(約1.0 m)、西側(後円部側)の高さ「三尺一寸許」(約0.9 m)、東側の高さ「二尺六寸許」(約0.8 m)、厚さ「六寸」(約18 cm)となる。

ここで問題となるのが、高さが東西で異なっている点である。この違いは、①本来同じ高さの石棺であったのが設置される際に傾けられた(あるいは後に傾いた)、②白石が水平に敷かれなかった、③当初から東西で高さの異なる石棺であった、という三つの可能性が考えられる。岸本一宏氏によると[岸本 1998]、方形突起が2個ついている短側石の方が埋葬者の頭位を示し、幅も高さも若干大きくなるという。そして頭位と墳丘との関係についても、前方後円墳の主軸に沿い、頭位(方形突起2個側)を後円部側に向けていることを明らかにしている。雲部車塚古墳の石棺をみると、棺の高さが高い方(西側)には、短側石



約1/50



約1/30

第57図 石槨と石槨（『車塚一蒔』付図を改変）

に方形突起が2個あり、後円部側を向くといった他例と共通する特徴をもつことから、石棺前後での高さの違いは設置や埋納の状態に影響されたものではなく、石棺自体に高低差があった可能性が高いと考えられる。

石棺細部の状況については絵図に表現されておらず、まったく不明であるので、ほかの石棺を参考とした〔岸本2009〕。まず、底石の形状については、長辺に沿って一段低い部分をつくり、その上に長側石をのせるようにし、短側石を受ける部分には溝を彫り込んでいる。蓋石については、長側石と接する部分には溝状の彫り込みをせず、面をもって長側石と接するだけである。その外側は、断面形が鉤形となって長側石を外側から引っ掛けるような加工をし、長側石側にはその鉤形に沿うように角を面取りした加工がある。

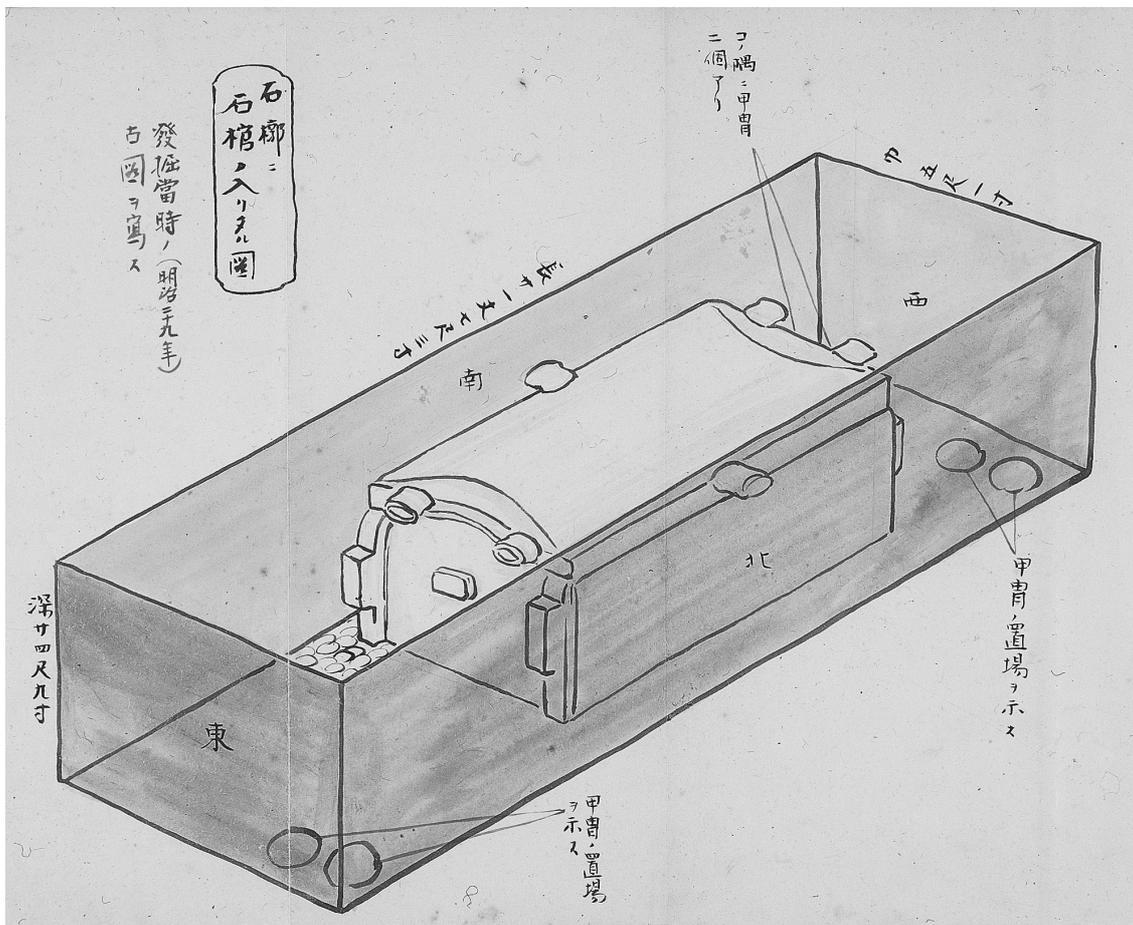
石材については、記録によると「石棺の石蓋は此地方になき夫の泉石と稱する青石なるもの」（『神戸又新日報』）とあるが、石棺の形態はほかの竜山石製長持形石棺と共通する特徴がみられるので、復元に際しても竜山石を使用した。ただし、古墳時代に製作された石棺に使われているような黄色の竜山石は山塊の表層部から産出されるのであるが、近年に採掘が進んだ結果、今では黄色を呈する表層部の石材を入手することが困難となっている。そこで今回は地下からでも黄色の竜山石が産出される高砂市魚橋山産の竜山石を使用した。

石棺の赤彩については、絵図でも記録でも石棺と同様赤く塗られていたと記されているし、ほかの長持形石棺にも同様であったとする例が多いが、記録の中には朱が染み出していたと記されているものもある。また、大阪府大仙古墳の絵図のように長持形石棺の縄掛突起の端面に赤色で文様が描かれていたという例もある。そのため、復元では赤彩はしていない。

(3) 出土状況の復元

出土状況についての記録を年代順に記すと以下のとおりとなる。

- ①明治29年5月20日 『車塚一蒔』「小石ヲ敷キ其上ニ甲冑刀相見エ候…」
- ②明治29年5月24日 『神戸又新日報』「(石槨の) 周圍に七八本の古鉾を交叉しあり」、「(石棺の) 上に古き太刀一振り甲冑一組其他種々の古器あるを發見したり」
- ③明治29年5月30日 『車塚一蒔』「(石棺の) 周圍に甲冑刀劍等ヲ陳列シアル」
- ④明治29年の絵図を写した『御治定御願』付図に、刀劍が壁に掛けられている様子や、甲冑が石槨の西側壁の南北両隅に2箇所ずつ、東側壁の北側隅の2箇所置かれていた様子が描かれている(第58図)。
- ⑤明治30年4月7日 『東京朝日新聞』「透明の海石を敷き、其上に甲冑刀劍等あり」
- ⑥明治30年8月15日 『車塚の話』「(石棺の) 前後には甲冑各二領づつあり、只甲冑と胴の外小手脛當草摺様のものは1つもなし」 「四周の石垣には鉄にて刀掛の如きものを造りたり。悉く刀劍を之に掛けたるものと想わるも半ばは己に朽ちて下に落ちたり」 [栗林 1897]



第58図 甲冑配置図 (『御治定御願』付図「石槨ニ石棺ノ入りタル図」)

⑦明治33年7月6日 『三丹新聞』「四方の壁石には古武具など多く掛けられ或は朽ちて落ち居れる」
「(石棺の) 前後には甲冑各二領つつあり、只冑と胴の外小手脛當草摺様のものは1ツもなし、四周の
石垣には鐵にて刀掛の如きものを造りたり悉く刀劔を之に掛けたるものと想はるるも半は己に朽ち
て下に落ち居れる」とあり、⑥とはほぼ同じ文章が記されている。

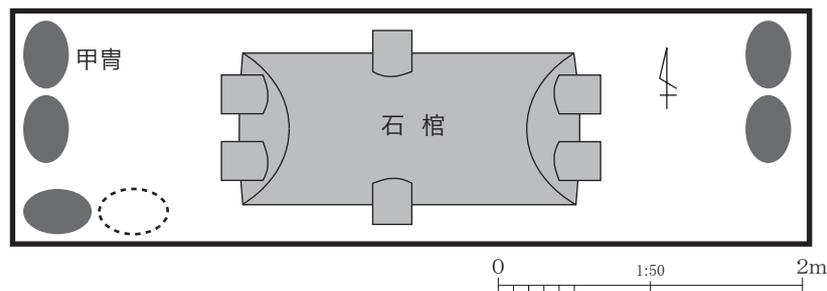
⑧明治34年12月20日 八木榮三郎氏は上記の新聞記事②③を引用した上で「彼地より直接予に報道せ
るものと少しく異なる所有り又足らざる點も見ゆれば聊か追記して補遺に充てんと欲す」として「四
方には二行に四本宛の刀劔を懸け、鐵の折釘を以て支へたり」「(石棺の) 前後に兜二個宛及び鎧片十
一個馬具二三個刀劔類十八九本不明の金輪數個を平行せりと云ふ」と記し、略図を掲載している。

⑨明治41年6月9日 『顛末記』は発掘当時の雲部村村長木戸勇助氏から聞き書きしたもので、「周囲
には腐った古刀、古劔、古鎧の類が稍規則的に圍繞している」「四方の壁には刀掛の様な鍵が打付け
て鎗だとか刀とかの類が掛けられてあったようだが、何分年月を経たため、その多くは下へ崩れ落
ちて不規則に打折れ累なり、或いは半ば鍵に掛かりながら、重に金属製のもの許りであるが…」と
ある。

これらの記録からは、石槨内の南西隅、北西隅、北東隅に甲冑が置かれており、壁面には刀劔類が掛
具によって掛けられ、石槨の上にも刀劔などが置かれていたようである。以下、個別に検討する。

まず、石槨内の甲冑であるが、図では南西隅、北西隅、北東隅にそれぞれ2点ずつ置かれていたよう
に描かれている。しかし、『車塚一蒔』などによると、出土した短甲の数が5点、冑が4点であり、絵図
との間に矛盾がある。短甲6点分の出土位置を絵図に描いたにもかかわらず、出土点数を5点と数えた
と考えるよりは、5点分の短甲が6箇所に分かれて出土したと考える方が自然であると考え、復元では
5点を配置した。また、絵図(第58図)のように甲冑4点を横並びに配置するには石槨幅が狭く不可能
であるため、南西隅には1点のみ横向きに配置し、北西隅と北東隅にはそれぞれ2点ずつを正面に配置
して復元した(第59図)。冑については有機質製のものが1点含まれていたか、あるいは破片となり1個
体として認識できず、本来は短甲とともに5点あったものが結果的に4点として記された可能性も考え
られるが、復元では記録にあわせて4点のみ配置した。

次に、壁面への副葬品の配置であるが、類例がなく真偽のほどはわかりかねる^{註11・12}。しかし、掛具
のような遺物が現存しており、発掘後間もない頃、すでに絵図として記録されていることから、復元に
あたっては記録に合わせて壁面に副葬品を配置した。配置状況については、「各壁ごとに2列ずつ」〔八木
1901〕といった記載もあるが、現在確認できる出土遺物の中で最短の劔4以外は短側壁に2列に配列す
ることは物理的に不可能である。よって、復元に際しては、短側壁の一部にだけ最短の刀劔を2列に配
置し、それ以外は1列に配置した。長側壁については、中央付近が石槨と石槨の間にほとんど隙間がな



第59図 甲冑配置復元図

いため、副葬品を配置することができなかった。そこで、石棺を避け、石棺の前後にそれぞれに1列ずつ配置した。ホコ1については長さが206.8cmもあり、短側壁に掛けることが不可能なので、長側壁に掛けた。これについても、石槨壁面の下部では石棺が邪魔となるので、上部に掛けることとした。

壁面への副葬品の配置作業は、展示工事の工程の都合により、石槨と石棺を設置した後、石槨内に入っておこなった。空間的に、石槨完成後でも副葬品を配置するのに問題はなく、石棺前後の空間において思ったより自由に行動できた。掛具の打ち込みについても石棺の復元を完全に終了してからおこなったのであるが、刀剣類をそれぞれが水平近くになるように配置するためには、2点一組の掛具もそれぞれにあわせて水平となるように設置しなければならなかった。しかし、石槨石材の目地が完全に水平に通っているわけではなかったため、掛具を打ち込む場所を左右にずらさざるをえなかった。結果として、掛具は上下左右に均等に整列して打ち込むことができなくなったのであるが、この状況は絵図に描かれている様子とよく似ている。なお、『御治定御願』付図(図版3)によると石棺の左右にある石槨との隙間部分においても、かなり下側にまで掛具が打ち込まれている。石棺の設置、石槨の構築後では、この部分に掛具を打ち込むことは困難であるので、本来は石槨の構築と並行して掛具が設置された可能性もある。

また、壁面以外に注目されるのが、石棺上への副葬品の配置である。『御治定御願』付図には刀剣類と思われる長細いものが1本描かれているのみであるが、ほかに「縦五寸横一寸程の眞黒なる石質の札石の如きもの」があったと記されている〔栗林1897〕。しかし、「何者か之を細折して遂に紛失せしめたり」とあり、現存はしていない。また「古き太刀一振り甲冑一組其他種々の古器あるを發見したり」(『神戸又新日報』)と記している資料もある。

遺物の復元については、現存する雲部車塚古墳出土遺物を基本としているが、埋葬当時の復元するには有機質部分が欠落し、また破片となり型式の不明な資料もあるため、同時期のほかの資料を参考に製作している。刀剣類の種類ごとの数量・分量については、現存する種類の比率に合わせている。短甲の復元については、現存する革綴短甲の破片、および八木熒三郎氏の報告に「金具の破壊せるものを見るに鎧は胴の横金に三角形の浮模様を出し」とあることから三角板革綴短甲として復元しているが、同じ八木氏の報告には「凡て鋌留の風を示せり」とある〔八木1901〕。よって、1点については、『車塚一蒔』に多鋌式の横板鋌留短甲のように描かれているものがあることも勘案して、その絵図に合わせて復元している。

(4) 復元作業を通じてみた石槨の構築と埋葬儀礼

先におこなった石槨の構築と副葬品の配置の復元から、雲部車塚古墳における埋葬儀礼について検討するが、発掘調査を経ているわけではないので、推測の域を出るものではない。

典型的な竜山石製長持形石棺の特徴として、石棺底石には長側石を受ける溝状の彫り込みがなく、内側に段をもつだけであり、底面が丸く彎曲するという点がある。この加工では棺が安定しないととも長側石が外側へ開くことを防ぐことはできず、石棺下半部を外側から土や石によって支えることで、はじめて安定させることができる。このことから、長持形石棺は埋葬地となる古墳上の墓壙内で組み立て、下半を埋め、裏込めによってはじめて安定することを前提に設計されていたものと考えられ、室宮山古墳における入念な石棺の裏込めの状況はそれを裏づけるものである。また、蓋石にも長側石上側が外側へ開くのを防ぐため断面鉤状の加工が施され、外側から長側石を挟み込んでいる。



第60図 埋葬施設の復元完成状況

このように、長持形石棺は単独では安定せず、長側石を周囲から支えることで安定する構造をしており、同じ役割を担う石棺蓋石の設置についても、棺身の設置後、比較的早い段階でなされた可能性が高い。当然、棺は墳丘上で組み上げられ、棺内への遺体の埋納、副葬品の配置がおこなわれたと考えられるので、墳丘までの遺体の運搬のためには別の運搬具が存在したのであろう^{註13}。

石棺を設置した後に石槨壁面を構築するのであるが、棺の安定という意味で、この時点ではすでに石棺に蓋石が置かれており、遺体が棺内へ埋葬されるのは石槨壁面が構築される前であった可能性が高い。そうであれば、遺体をおさめ、副葬品を配すといった「最終的な遺体埋葬儀礼を執り行う「場」」〔和田1989〕の完成形は、長持形石棺の身を安定させた状態であったことになる。そして遺体埋葬儀礼が終了すると石棺に蓋がなされ、石槨壁面の構築がはじまる。

壁面の構築と掛具の設置は、先に記したように石棺と石槨との位置関係から並行しておこなわれた可能性もある。そうであれば石槨構築時には、ある程度副葬品の配置を意識していたことになるが、石槨壁面構築後に掛具が設置された可能性も残されており、明らかにすることはできない。また、たとえそうであったとしても掛具の設置と副葬品の配置は同時とは限らない。

石棺の蓋石上に配置された副葬品については、置かれたのが石槨壁面の構築前であったのか、壁面構築と同じ段階であったのか、あるいは壁面構築の後であったのかは明らかにできない。仮に石槨壁面、石槨床面、石棺上面への副葬品の配置が同時であったとするならば、石槨壁面が完成し、天井石を架ける直前の段階であったとすることができ、配置後は天井石の設置、粘土による被覆へと続くことになる。

なお、割竹形木棺を有する前・中期の竪穴式石槨では棺身を設置した後にまず石槨下部を築き、それから遺体をおさめ、棺の内外に副葬品を配置、棺蓋の設置、石槨上部の構築へと進んでいく例が明らかにされている〔和田1989〕ので、雲部車塚古墳においても床面に配置された甲冑類の副葬については同様に石槨の下部だけを築いた後であったのかもしれない。しかし、いずれにしても雲部車塚古墳の場合は

壁面に副葬品が掛けられていたと考えられることから、棺外への副葬品配置の完了は石槨壁面がほぼ完成した後であったといえるので、刀剣類の壁面配置は、棺を覆うように積まれた石材とともに遺体埋葬儀礼後の遺体を保護・密閉するという工程の一つとしておこなわれたものといえる。

おわりに

断片的な資料しかない雲部車塚古墳の石槨・石棺・出土状況について、できるかぎり「復元」することを目的に考察した。事実は今も土の中にあり、復元との整合性を確認することはできないが、あくまでも博物館の主人公である観覧者にとっては迫力のある展示物として提供できていると思われる。

見せ方について問題となったのは、石槨の内部がみえるようにしながら本来の「密閉された空間」をいかに演出するかであった。石槨内部をみせるために、実測図を書くように単純に縦断面を切ってしまうと機械的な復元になり、遺構としての臨場感がなく、かつ石槨の奥行きを感じることができないようになってしまう。そこで、壁面のうち観覧者側の壁の最下段は残すことにし、壁面上部のみ開放させた。すなわち、石槨長側壁の一部分を裏側から取り崩し、自然に開いた口からのぞき込むようなジオラマを製作した。一方、土層部分については不必要な情報とならないよう機械的に断ち割った断面にした。その結果、遺構としての臨場感を出しながら、石槨の空間を壊すことなく内部を観察できるようにすることができた(第60図)。

また、復元した墳丘の上には、石棺を方形に囲っていたという円筒埴輪を置いている。この埴輪は実測図〔徳田ほか2006〕を参考に復元したもので、製作にあたっては考古楽者(考古博物館ボランティア)の協力を得ている。この埴輪を設置したことで、復元された墳丘から上に広がる空間を演出できた。

今後は来館者調査をおこない、展示物としての評価をしていくとともに、その利用についても検討していかなければならない。

〈謝辞〉

本節を成すにあたり、以下の方々にお世話になりました。記して感謝の意を表します(50音順・敬称略)。

池田朋生 池田正男 岸本一宏 高木恭二 山本三郎 和田晴吾

〈註〉

- 1 『車塚一蒔』は、1896(明治29)年に雲部車塚古墳が発掘された当時の村長木戸勇助氏が、車塚古墳に関する土地の買収・請願・通達などの公私文書を年代順に綴じたもので、1896(明治29)年から1910(明治43)年10月13日の文書がある。
- 2 絵図の中でも、『車塚一蒔』の付図、および1896(明治29)年に描かれた絵図の両者に拠っている。なお、後者については現存しておらず、1935(昭和10)年に多紀史蹟研究会から宮内大臣あてに提出された請願書「兵庫縣多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願」の付図として添付された「發掘當時(明治二十九年)ノ古図ヲ寫ス」と記されている「何人カノ筆ニ成ル見取図」(図版2・3, 第58図)(以下『御治定御願』付図)が確認されるのみである。
- 3 基本資料として参考にしたのは以下の資料である。
 - ① 1896(明治29)年5月14日～1910(明治43)年10月13日『車塚一蒔』。
 - ② 1896(明治29)年5月24日付「古墳発見」『神戸又新日報』(以下『神戸又新日報』)。
 - ③ 1897(明治30)年4月7日付「丹波車塚の石棺」『東京朝日新聞』(以下『東京朝日新聞』)。
 - ④ 1897(明治30)年8月15日、栗林貞清氏が青年大会においておこなった講話の記録〔栗林1897〕(〔中山1970〕所収)。
 - ⑤ 1900(明治33)年7月6日付「車塚發掘」『三丹新聞』(以下『三丹新聞』、〔考古学会事務所1900〕所収)。
 - ⑥ 1908(明治41)年6月9日に高家正一氏が村長木戸勇助氏から聞き取りした『四道將軍丹波道主命之御陵墓顛末記』(以下『顛末記』、〔中山1970〕所収)。

- 4 [栗林 1897] や『三丹新聞』では2尺とある。
- 5 『車塚一蒔』および『御治定御願』付図では5石、『三丹新聞』では6石、『顛末記』では7石となっている。
- 6 『三丹新聞』に記されている。なお、『顛末記』には、長さ約「二間」(約3.6m)、幅約「三尺」(約0.9m)、厚さ約「一尺」(約0.3m)とある。
- 7 現在確認できる例として、奈良県室宮山古墳〔秋山・網干 1959〕・屋敷山古墳〔菅谷ほか編 1975〕がある。
- 8 『三丹新聞』による。
- 9 『車塚一蒔』、『神戸又新日報』による。
- 10 『三丹新聞』、[栗林 1897] による。
- 11 壁面の突起に刀が掛けられていた唯一の例として、熊本県宇土市神ノ山1号墳の家形石棺がある。石棺ではあるが、短側石の棺内側に1対の突起があり、その上に剣が置かれていた〔高木 2002〕。高木恭二氏によると、凝灰岩製の「刀掛突起」をもつ石棺や石室はこの地域に9例あり、5世紀後半から6世紀中頃の古墳で、その石材のほとんどが宇土市網津町野添や網引町清辻付近で産出される凝灰岩であるという〔高木 2009〕。なお、兵庫県加西市玉丘古墳の長持形石棺にはこの刀掛突起と形状が類似する突起がある〔梅原 1932〕。両者の関係は明らかではないが、九州地方の装飾古墳の中には壁面に鏡がぶら下げられているような絵が描かれたものや、刀が描かれたものもあり、実物の刀剣類が掛けられた雲部車塚古墳との関係の有無が注目される。
- 12 石室内に立体的に副葬品を配置する例としては、6世紀以降の「立てかけ副葬」がある〔日高 2008〕。また、鉄製品が壁面に差し込まれた例も後期古墳では確認されつつある〔右鳥 2008〕。なお、室宮山古墳の蓋石と側壁の間からは幅約1.0cm、厚さ約0.5cmの「棒状鉄板」が検出されているが、用途は不明である〔秋山・網干 1959〕。
- 13 和田晴吾氏は奈良県粟山古墳出土の堅板などの船材について「この船が一般的な船でない」とした上で、「この船は遺体そのものを乗せて運んだものと考えられる」として、古墳への遺体の運搬の一案として船を紹介している〔和田 2009 pp.259-260〕。

〈参考文献〉

- 秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18冊 奈良県教育委員会
- 池田正男 2002「何人カノ筆ニ成ル雲部車塚古墳」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 pp.43-68
- 石田茂輔 1967「日葉酢媛命御陵の資料について」『書陵部紀要』第19号 宮内庁書陵部 pp.37-62
- 宇垣匡雅 1987「堅穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—(下)」『考古学研究』第34巻第2号 考古学会 pp.79-82
- 梅原末治 1932「富村玉丘古墳」『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯 兵庫県 pp.40-54
- 奥田 尚 2002「石からみた古墳の造営」『石の考古学』学生社 pp.74-110
- 岸本一宏 1998「竜山石製長持形石棺の特徴と埋葬方向」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻 網干善教先生古稀記念会 pp.591-610
- 岸本一宏 2009「播磨竜山石製長持形石棺の分類と変遷」『考古学の視点 兵庫発信の考古学』間壁葎子先生喜寿記念論文集〔献呈篇〕 間壁葎子先生喜寿記念論文集刊行会 pp.111-134
- 京都大学総合博物館 1997『王者の武装—5世紀の金工技術—』京都大学総合博物館春季企画展示図録 京都大学総合博物館
- 栗林貞清 1897「車塚の話」『多紀通信会雑誌』10号〔中山編 1970 pp.35-42〕所収
- 考古学会事務所 1900「車塚の發掘」『考古』第1編第5号 考古学会 pp.57-60
- 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡書院
- 末永雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社
- 末永雅雄 1975『古墳の航空大観』学生社
- 菅谷文則・久保哲正・大山真充(編) 1975『新庄屋敷山古墳』新庄町
- 高木恭二 2002「神ノ山一号墳」『宇土市史』資料編第2巻 宇土市 pp.152-154
- 高木恭二 2009「石棺の中に刀掛突起が」『宇土の今昔百ものがたり』宇土市 pp.32-33
- 坪井正五郎 1912「河内小山村城山古墳の調査(二)」『人類学雑誌』第28巻第9号 東京人類学会 p.516
- 徳田誠志・有馬 伸・加藤一郎 2006「雲部陵墓参考地墳塋柵護岸その他工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第57号 宮内庁書陵部 pp.29-61
- 中山正二(編) 1970『雲部御陵墓参考地—車塚研究資料集—』多紀文化顕彰会

2 石槨・石棺と出土状況の復元

- 西口陽一 1987 「石・古墳・淡路」『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会 pp.118-129
- 日高 慎 2008 「後期古墳における刀類立てかけ副葬について」『王権と武器と信仰』同成社 pp.784-795
- 兵庫県教育委員会 2004 『県立考古博物館（仮称）基本計画』
- 藤井利章 1982 「津堂城山古墳の研究」『藤井寺市史紀要』第3集 藤井寺市 pp.1-64
- 右島和夫 2008 「横穴式石室の空間構造—石室壁面に差し込まれた鉤状鉄製品—」『王権と武器と信仰』同成社 pp.346-360
- 八木契三郎 1901 「丹波國多紀郡雲部村の古墳發見品」『東京人類學會雜誌』第17巻第189号 東京人類学会 pp.93-98
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元第6巻 講談社 pp.105-119
- 和田晴吾 2009 「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集 国立歴史民俗博物館 pp.247-272

〈挿図出典〉

- 第56図 1・2は〔秋山・網干1959〕、3は〔末永1961〕、4は〔藤井1982〕より改変引用。
- 第59図 筆者作成。
- 第60図 筆者撮影。